

アジア研図書館にアーカイブズを！（アジア研図書館を使い倒す 第32回）

著者	加藤 聖文
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジア研ワールド・トレンド
巻	239
ページ	55-55
発行年	2015-08
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00003149

第三二回

アジ研図書館にアーカイブズを！

加藤 聖文

日本とアジアの歴史的な関係は、戦前においては植民地支配や戦争、戦後は経済援助を通じて形作られてきた。それは、欧米諸国とアジアとの関係に比べても多様かつ刺激的なものであり、日本がアジア諸国へ与えた歴史的影響は決して小さくはないのである。

しかし、このような深い歴史的関係を現在の日本は上手く活用できていないようだ。それは、アジア専門のアーカイブズ（文書館）が、歴史的関係の深さに比べてあまりにも貧弱なことからもいえるのではなからうか。

日本には、アジア研究を名乗る研究組織は数多くあるが、それは所属する研究員がアジアに関する研究をしているだけであって、研究の基礎となる資料を積極的に収集・公開しているわけではない。

そうしたなかで、唯一、アジ研図書館は、アジア関係の資料収集が充実し、実に使い勝手が良かった。私はアジ研が移転する前の市ヶ谷時代、主に満鉄関係の資料を利用していたが、図書に止まらず、歴史資料も含めて体系的かつ継続的な収集姿勢には感心したものである。また、自館に止まらず他館所蔵資料も含めた情報のネットワーク化（この頃はインターネット検索ではなく総合目録という媒体だったが）に取り組んでいたことも先駆的であった。

さて、幕張に移転してからのアジ研図書館は市ヶ谷時代とは比べものにならないくらい立派になった。それはそれで喜ばしいことだが、そ

れに比例してコレクションもますます充実したかという点、残念ながら首をかしげざるを得ない。

専門分野に特化した図書館の場合、体系的かつ継続的な収集活動によって、専門性の高いコレクションの充実を図ることが組織の存立に直結する。しかし、昨今の財政事情から、このような活動はどこでも縮小傾向にある。

こうした逆風下の図書館業界では、これまでの図書一辺倒を転換して、アーカイブズのように文書資料の収集・整理・公開を行える機能を拡充しようという動きが注目されてきた。アジ研も図書・刊行資料以外に、山崎元幹文書のよ

うな文書資料も数多く所蔵されており、アーカイブズ機能を備えうる要件は揃っている。しかし、こうした文書資料は、図書と異なる整理や保存管理が必要であり、通常の図書館業務の片手間で対応できるものではない。とはいえ、新しい予算を獲得したり施設を増設したりしなくても、現有戦力内で適切な業務分担と人材育成といったマイナーチェンジで十分対応できるものであるから、是非、この問題に取り組んでもらいたい。

諸外国の大学や研究所には、それぞれの専門性に応じたアーカイブズを組織として持ち、多くの研究者に利用提供することで学術研究の発展に寄与している。これらのアーカイブズが扱っているのは、過去の資料であって、現在の諸問題の分析や解決に直接繋がるものとはいえないものも多い。だからといって不要なものとは

一概にはいえない。

日本では大きく誤解されているが、情報とは新しければ新しいほど良いわけではない。過去から現在にいたる「厚み（情報の蓄積）」が必要なのであって、これが基礎になって現状分析がより確かなものとなる。

また、その蓄積があればあるほど、研究の多様なイノベーションを生み出す可能性も高まる。アメリカの大学や研究機関が、積極的に知的情報発信を行えるのもこうした過去から現在までの情報蓄積があるからで、その蓄積の器がアーカイブズなのである。

二一世紀はアジアの時代などといわれているが、その知的情報基盤を担える可能性を日本は持っている。近代から現在にいたる日本とアジアとの歴史的関わりは、戦後に経済成長を遂げたアジアの国々にとって、自国の歴史を検証し二一世紀の将来像を構想するための貴重なヒントを与えてくれるのである。その素材となる歴史資料は、まだ誰も気づいていないだけで、探せば国内でいくらかでも出てくる。それだけ日本とアジアの関係は深い。

私が期待したいのは、アジ研がこうした知的情報基盤を担うために、アーカイブズ機能を強化して、日本とアジアの歴史に関わる多様なコレクション——例えば、戦後の対アジア経済援助に関わった企業・団体や個人の文書——の充実に努めることが重要なものではなからうか。そうすれば、それを求めて世界各地から研究者が集まり、自然と日本から世界に向けて積極的な情報発信が行われていくであろう。

（かとう きよふみ／人間文化研究機構 国文学研究資料館准教授）